

学長カフェ 川嶋みどり先生講演会

本学では、地域の未来とケアの文化について市民の皆様と一緒に考える知の交流の場、「学長カフェ」を行っています。毎回多彩なゲストをお招きしています。1月21日、「ケアの心は看護師の独占物ではない」ということばで始まる『看護の力』の著者、川嶋みどり先生（日本赤十字看護大学名誉教授）をお迎えすることができました。当日は大雪の降るなか、会場の長野バスターミナル会館国際ホール（長野市）に120名の方が来場し、熱心に耳を傾けていました。

医療技術の進歩には目覚ましいものがありますが、一方で「長生きしても報われない社会」といった危機もとどろがたされています。

60年以上の看護師経験をもち、ナイチンゲール記章、若月賞も受賞されている川嶋先生は、看護の歴史と今日の状況を踏まえながら、明日のケア社会の在り方についてお話をされました。講演要旨をご紹介します。

講演要旨

ケアの文化と看護の力



川嶋みどり

日本赤十字看護大学名誉教授
（一社）日本て・あーて推進協会代表

ケアの営みは、未開社会の時代から生存に必要な食材の入手をはじめ、弱い者や幼い者への世話をを行う女性たち

の智慧と工夫によって、その内容を豊富にし、やがて国や地域の文化として根づいて来たのでした。その底に流れるケアの心は、いのちを大切にす思想と、何かの誰かの「役に立つ存在」としての人間の本質とも重なっています。

「生命を維持・継続する日常的習慣的ケア」（マリリー・コリエール）という言葉からも理解できますが、ケアの基盤は、誰もが生きて行く上で欠かせない日々の習慣的な営みを滞りなく行うことにあります。幼い頃から見よう見まねで習慣化されてきた日々の営みは、自分自身に与えるケアでもあります。

ただ、その自立性が病気や手術、高齢や何らかの障害等で損なわれた場合には、他人がこれを埋め合わせる必要があります。実はその行為自体に、病気を癒やし心身の回復過程を促す要因が含まれていることは、種々の民間療法や家庭療法などにその証しを見ることが出来ます。こうして、医学的知識の未確立な時代から洋の東西を問わず、心身の不調や怪我などの対処は家族内で行われてきたのでした。これらのケアの蓄積により、生命を維持し、健康に暮らすために何がよいか悪いかを決定する文化となつて、世代間に継承されコミュニティの中に広がったといえます。それ故に、ケアは、看護師だけのものではないのです。

とはいえ、産業・交通の発達には疾病構造に変化をもたらし、病院医療の普及とも相俟って職業としての看護の誕生を促しました。また、戦時救護を視野に入れた看護師養成が始まったのでした。こうして、時代の要請、社会のニーズに添って、看護は職業化され、進歩した医療とともに進化を遂げて来ました。今では、



全国に250を超える看護系大学が存在するようになって、多くの学徒たちが看護の専門性に関して研鑽を続けています。でも、どんなに高度な理論を学んでも、他人をいたわり気遣う思いは共通に持ち続けることは勿論、医学とは異なるアプローチで病人や高齢者の不具合や不調に向き合う必要があるのですが…。

専門的な看護の技術（アート）は国を超えて共通ですが、看護の受け手の生活習慣やケアの方法は、それぞれの国や民族の背景、生活様式によって特色があります。看護によって得られる「気持ちよい」という感じ方一つとっても文化の影響を強く受けます。超高齢化の時代に求められる看護は、特有な日本文化の流れに添った実践であることは間違いありません。そこで求められるのは、みずみずしい感性をフル稼働させた人間らしい共感能力ではないのでしょうか。便利さや効率さを追い求め過ぎて、古くからのよい伝統や文化が失われつつあること、途絶えた文化を復活させることは容易ではないのですが、長年看護師であり続けた立場から話題を提供し、みなさまとともに考えてみたいと思います。



本学は、地域の暮らしに深く根をおろし、学知と本当の優しさに裏打ちされた知恵によってケアの文化を支え、世界をより善いものに変えていく。そんな人々を世に送り出す大学として、多くの卒業生と支援者に支えられ、小規模校ながら、「かたち」のみの格付けを超えた、活力と気品に満ちた、別格、別品の大学であり続けたいと思います。みなさまが清泉での学びに加わられる日を楽しみにお待ちしております。

学長 芝山 豊